

Glocal Tenri



6

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.16 No.6 June 2015

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
石炭火力発電
／深谷忠一 1
- ・ 天理教教理史断章 (93)
近愛文書^⑭
／安井幹夫 2
- ・ 『教祖伝』探究 (12)
針ヶ別所村事件
／深谷忠一 3
- ・ 「おふでさき」天理言語教学試論～「こ
と」的世界観への未来像～ (14)
第2章 本居宣長『古事記伝』②
／井上昭夫 4
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (3)
「うを」について③
／佐藤孝則 5
- ・ 「おふでさき」の有機的展開 (38)
第六号：第百四首～第百三十四首
／深谷耕治 6
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (6)
『天理教教典』における「道」④
／澤井治郎 7
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッ
パ関係試論 (1)
はじめに
／森 洋明 8
- ・ 新宗教のブラジル伝道 (26)
日本の新宗教の組織的展開^⑩
／山田政信 9
- ・ 地域福祉を拓く ―新たな寄付文化の創
造― (6)
共同募金の「期間拡大」
／渡辺一城 10
- ・ 遺跡からのメッセージ (1)
遺跡がなくなつて過去と現在①
／桑原久男 11
- ・ ヴァチカン便り (14)
法王就任後2年間の総括
／山口英雄 12
- ・ English Summary 13
- ・ おやさと研究所ニュース 14
出張報告・釧路湿原に分布するキタサンショ
ウオオの生息状況調査 (佐藤孝則) / 第
281 回研究報告会『『神秘主義』および『神
秘体験』概念の再検討―根源的信仰論に向
けて』(渡辺優) / 『グローカル天理』年間
購読のご案内 / 「出前教学講座」申し込み
受付 / 「教学と現代11」第4回第3講：田
中親男「カンボジア伝道の現在」(金子昭)
／新連載執筆のねらいと執筆者紹介 / 新刊
紹介

巻頭言

石炭火力発電

おやさと研究所長 深谷忠一 *Chuichi Fukaya*

「関西電力は石油元売り大手の東燃ゼネラル石油と共同で、千葉県市原市に出力100万kW級の大型石炭火力発電所を建築する方針を固めた。投資額は3,000億円程度で、2020年代半ばの運転開始を目指す」と、『読売新聞』(4月13日朝刊)が報じていました。

この記事を読んで、「これからまた19世紀に戻るの？」などと感じた人が多いかと思いますが、しかし、“石炭火力は19世紀の遺物、20世紀以後は石油の時代”というのは誤解で、実際には今でも、日本の電気の30%は石炭火力で作られています。日本以外でも、隣りの中国では76%、アメリカでも36%、世界全体では41%が石炭火力発電なのです。

石炭は石油や天然ガスの約2倍の埋蔵量があるといわれ、世界中に広く分布しています。ですから、政情不安の影響も受けにくく(輸入量の40%は日本企業が開発・生産する「自主石炭」である)、値段も安定しています。化石燃料の調達を輸入に頼る日本のような国でも“油断”のような心配がないのです。

しかるに、衆知のように、化石燃料を燃やす発電には、地球の「温暖化」と「大気汚染」を引き起こす問題があります。その中でも、他の火力発電の2倍以上のCO₂を出しているのが石炭火力発電なのです。

それで、日本の各電力会社は、石炭ガス化複合発電(IGCC)や石炭ガス化燃料電池複合発電(IGFC)など、CO₂及び硫黄酸化物や窒素酸化物などの有害物質を減少させる技術開発を進めてはいますが、

しかし、それら世界の最先端の「クリーンコール技術」が実用可能になったとしても、そのクリーン度は、よくて石油火力発電と同程度だと言われています。

そこで、さらに、CO₂を地下に埋め込む二酸化炭素回収・貯留技術(CCS)の開発も試みられてはいますが、それにも、日本には埋蔵する適地が少ないこと、そのために、技術的なハードルが高くなり費用も嵩むことを考えると、その実用化はまだまだ先になると思われます。

しかるに、それでも、2040年には現在の2倍になるといわれる世界の電力需要に対応するためには、経済性やセキュリティに勝る石炭火力は欠かせないと言われ、日本でも上記以外に約40カ所の石炭火力発電所の新設計画があるのです。

薪から石炭へ、さらには石油へというように、ある支配的な燃料から別の燃料に移行するためには、その燃料の採掘・産出方法や、流通チャンネル、利用機器を変更する必要があります。そのインフラを整備するためには、2～3世代、すなわち50～75年をかけて、社会全体で膨大な投資を行う必要があります。その後も、その投資の償却するのに長年かかります。ですから、今、数千億円をかけて新たな石炭火力発電を作るとは、これからまた何十年もCO₂及び硫黄酸化物や窒素酸化物の排出を続けることになってしまいますが、さて、それで環境問題はどうなるのか？それが子や孫の世代に取り返しのつかない負の財産を残すことにならないのか？それを、今、しっかりと検討する必要があるのではないかと思う次第です。